

## 追悼 高橋武智さん



### 高橋武智さんを送る

有馬 保彦

去る6月22日、本会元共同代表の高橋武智<sup>たけち</sup>さんが逝去されました。享年85（1935年生）。

故人は、2006年、本誌「市民の意見」（旧誌名「市民の意見30の会・東京ニュース」）の編集委員にられました（それまでは、故吉川勇一氏が責任編集）。

2013年から吉川氏、本野義雄氏とともに、本会の共同代表になられ、2015年に吉川氏が亡くなられてからは、2016年10月まで、本野氏とお二人で共同代表をされていました。

故人は、長年反戦平和運動に関わっておられました。1965年、パリ留学中、故小田実氏が同地を訪れ、その出会いを機に「ベトナムに平和を！ 市民連合」（通称・ベ平連）に参加し、ベトナム反戦運動に尽力されました。

ベ平連運動は、日本にいる米軍兵士への反戦の呼びかけ、働きかけへと繋がりを広げていきました。その運動の中で67年、米空母イントレピッド号の兵士4人が脱走、その4人の保護とスウェーデンへの脱出援助を契機に、米軍脱走兵への支援を行なうジャテック（反戦脱走米兵日本技術委員会）が作られ、故人はその中で活動をされました。

69年に航空自衛隊佐渡駐屯地で小西誠氏（当時、三等空曹）が治安出動に反対するピラを基地内で撒いて逮捕された際、ジャテックの運動は、いち早くその救援、裁判支援活動へとつながるものでもあったのです。

本会は30の提言（マルチ・イシュー）を掲げています。イラク反戦運動が高揚していた最中のある日、編集会議前の雑談の際、吉川氏から、30の提言の何を一番の目的として会に参加されていますか、との問いかけがありました。故人は「反戦です」と即座に明確に答えられました。同席していた私を含む2人も同意見でした。そのことが今でも心に残っています。

2017年、「空母イントレピッド号の4人」の脱走兵の一人、クレイグ・アンダーソン氏が立教大学で講演をした際、故人はケアホームに入所しておられました。そこから駆けつけ、元気な姿でアンダーソン氏と交流をされています。

故人の、海外での兵役拒否運動への共感、軍隊による民衆虐殺への批判、長年の反戦運動との関りを通じたその思想化の営みは次の書評に現れています。

その書評（莊子邦雄著『人間と戦争——学徒兵の思想史』、「市民の意見」138号、2013

年6月発行に掲載)の中で、故人は第一次大戦の前線で対峙するドイツ兵とフランス兵の「交歓」のひとつときと、沖繩戦のさなか阿嘉島での日米兵士の会食の例を挙げ、「戦争がつづく今こそ、戦争体験を改めて伝承し継承しなければならぬわけだが、この営みは体験を歴史化し、思想化するためにこそ必要ではないだろうか。(中略)軍隊と

## オルグの達人を追悼する

高橋武智が逝った。個人的には、都電魚籃坂下の停留場を思い出す。70年前、その近くに止まった車のフロントガラスに、朝鮮半島で戦さの火蓋が切られたことを報じる号外が置かれていたのを高橋が見つけたのだ。麻布中学3年生の私たちは学校帰りで、目黒行き電車を待っているところだった。その同じ日か数日前のことか記憶が定かでないのだが、高橋は私に「重大な」秘密を打ち明けた。——実はぼく、共産党に入っているんだ。君も入らないか？

私の答えは、——ぼくも入れてくれ、だった。まるで、草野球のチームに誘われたみたいだ。その結果、「下山・三鷹事件の真相」という1冊10円のパンフレットを売らされ、週1回の「細胞会議」に出席することになった。朝鮮戦争の

いう『強制機構』のもとにありながら、何がこのような希有の機会を出現させたのだろうか？ このことの考察こそ、戦争の克服へ近づく一歩ではないだろうか？」と問いかけています。

ご冥福をお祈りします。

(ありま・やすひこ／本誌編集委員)

## 本野 義雄

激化と共に党内紛争も激化し、嫌気がさした私は1年後に脱党届を提出した。

10数年の歳月が流れ、高橋は立教大学教員に、私は民間放送TBSの記者になっていた。1967年末、私は高橋から人生2度目のオルグを受けた。「ベトナム戦争を拒否して脱走して来る米兵を援助するジャテックの運動に参加してほしい」。私と当時の妻の坂元は、全面的にその活動にのめり込むことになった。

当時、ジョンソンというスパイがジャテックに侵入、北海道とソ連・ヨーロッパという脱走兵の送り出しルートが利用出来なくなるという事態が発生していた。ベ平連から特使としてヨーロッパに派遣された高橋は、数カ月にもわたる苦闘の末、フランスの第2次大戦時の対独抵抗組織「ソリダ



麻布高校時代の高橋武智(手前左)と筆者(一番奥)

リテ」の協力を得ることに成功した。帰国後の彼は独特な方法でひそかに協力者を集めて変造旅券を作成、70年から71年にかけて2人の脱走兵を無事ヨーロッパに送り出した。

これは、ジャテックの出発点となった「空母イントレピッド号の4人」の脱出に匹敵する快挙だったが、事柄の性質上公にするわけには行かず、私たちは秘密を保持し続けた。71年夏、京都べ平連の鶴見俊輔さんに高橋が報告した時のことは忘れ難い。高田馬場の喫茶店で席につくなり、高橋は——先生、全て成功しました、と言ったまま言葉が続かなくなった。見ると、彼は文